特別支援教育部会（中学校）

県研究主題
一人ひとりの教育的ニーズを踏まえた教育課程の編成と教育活動の展開の工夫・改善

提案１　　提案者　福井　優子（横須賀地区）

＜研究主題＞
校内支援体制の中の特別支援学級の役割と教育活動をつなぐ工夫

１　提案内容

（１）本校の特別支援学級

①生徒の実態・通常の学級への交流・授業、生活の形態

②テーマ設定の理由

・卒業後の進路や集団での活動を意識し、社会性やコミュニケーション能力の向上を踏まえた

・教育相談コーディネーターの働きが、生徒の成長につながっている。

③テーマに迫るための手立て

・ねらいを明確にして、保護者と共通理解を深める。

・支援の流れを具体化し、教職員で共通理解をした。

・“生徒指導担当者会”と“生徒支援係会”で方針や実践を積極的に報告。

（２）実践

①通常級に所属しながら、特別支援学級の授業に参加した生徒について

（Ａさん～Ｅさんの様子、授業の参加状態、課題）

②特別支援学級の指導（集団としての指導、生活のルール、授業の場面、TT の活動）

（３）結果

①生徒の変容が明らかにみられ、確実に成長を促すことができた

②通常級から参加した生徒も安心して活動し人と関われるようになった

（４）考察

①通常級の生徒で、集団に入れないというケースでは、特別支援学級のノウハウを資源として活用することで、生徒への指導や支援を充実させることができる

②通常学級の生徒の特性を理解した支援や指導を実践すること

・インクルーシブ教育の深い理解と実践を推進していくことがポイント

・教員がもつ“ノウハウ”をさらに多くの教員で共有しあうことが必要

２　協議内容

（１）質疑応答

Ｑ１　①通常の教室から来る生徒の抵抗感はあるか？②在籍の違いによるカリキュラムの違いは？③それぞれの評価はどのようにしているか？

Ａ１　①抵抗感は生徒による。本人の気持ちを大事にしながら、教員がよき道を提示している。様々なアプローチから、生徒は喜んでいる②保護者も含めた面談を実施し学習を積み重ねている。③進路先により、支援学級、交流級での学習・試験を実施し、評価を出している。

Ｑ２　自主性、自治活動ができるための班、メンバー決めなどの活動に向けて、教員は何をして

いるか？

Ａ２　教員が上級生を中心に班長を決めている。班長に対しどの生徒を同じ班にするか考える。クラス編成と同じ感覚。係の決め方も同じ。

３　グループ協議・内容発表

・この形での指導は生徒の状態による。個別対応が必要な場合、難しい。支援学級担任は、意識を高く学校内での更なる役割を考えていきたい。

・学習支援教室を用意し、直接指導をしないケースを想定している。なぜなら、支援学級担当教員は対象生徒に対して的確な支援をするため。一般級生徒との関わりは現実難しい。特別なカリキュラム（特別支援学級独自の学びなど）をする時、一般級生徒がいることで活動できないことも。

・交流の仕方、考え方が、各校の背景で違う。学習？人との関わり？校内体制の整備が必要。“特別支援”“障害児学級”などの言葉の壁についての改善が必要である。

・生徒指導の基本を押さえた日々の指導がポイント。特別支援コーディネーターの校内での役割は重要。インクルーシブ教育を理解しながら個々の特性を理解した教育をしていきたい。

・交流の課題と方向性を話し合った。交流での学習よりも、特別支援学級で、落ち着いた学習環境を提供することを優先させているケースも。生徒の理解、保護者の理解、学校の理解を共通化しておくことが必要。

４　助言

　インクルーシブ教育の推進につながる提案であった。神奈川県の教育理念をとらえることを引き続き行っていきたい。校内体制やシステムを確立していくことも重要で、多様な学び場、環境の整備をすすめていきたい。子どもたちの教育的ニーズを教員がとらえること、保護者が安心できること。学校全体がチームとして活躍できる環境にしていくこと。学校が専門性の担保をしていくこと、人材育成が継続した課題であるととらえている。

５　まとめ

（１）発達障害者支援法について

・今年度改訂された。家族も含めたきめ細かな支援。地域の身近な場所で受けられる支援に。

（２）次期学習指導要領について

・今年度内に答申が予定されている。平成 33 年から全面実施予定。

（３）キャリア教育の視点について

・教育活動全体を通して行う。自分らしい生き方を実践していく。小学生は、社会性・自主性

・中学生は、自らの役割、将来の生き方、進路の決定

提案２　　提案者　興津　敬代（県西地区）

＜研究主題＞
個に応じた指導と支援のあり方　～キャリア教育の視点を取り入れた授業の改善～

１　提案内容

（１）生徒の実態とテーマ設定の理由

本校の特別支援学級は２学級設置され、生徒数 10 名・担任３名・支援員２名で構成されている。生徒の特性は様々であるが、コミュニケーションについては特別支援学級内ではある程度関わっていても、交流場面では課題が見える。交流場面で人との関わりを通して自分や友達の長所を知ったり、挨拶や返事をすることでコミュニケーションを取ったりして豊かな人間関係を築くことこそが、生徒の社会的自立へつながると考えられる。しかし現状では、人間関係の広がりが十分とはいえない。また、本校では例年職業体験を実施しており、その中で「挨拶や返事ができない」「わからないときにスタッフに聞くことができない」など様々な課題も見えてきた。

また、学習指導要領には、その柱の一つに「自立と社会参加に向けた職業教育の充実」が挙げられている。これはいわゆるキャリア教育の推進を目指したものであり、生徒の実態と課題に照らし合わせ、キャリア教育の視点が求められていると考え、本テーマを設定した。

（２）テーマに迫るための手立て

平成２３年度の中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」を受けて、「働くこと」を「何かすることによって人に認められ、人に役立つこと」と広義にとらえ、「学校生活や家庭生活での役割を果たすこと」とした。また生徒の実態把握は、「かかわる力」「いかす力」「みとおす力」「うごく力」「みつめる力」の５つの力を視点とした。

５つの視点から生徒の課題について実態把握をした後、実践にあたっては通常の授業に関連付けることでそれぞれの力を育成することにした。本提案では、各教科、総合的な学習の時間（職場体験）と美術（壁面づくり）の３つの実践について、キャリア教育５つの視点のうち、どの視点に関わった学習活動かをチェックして取り組み数をまとめ、検証した。

各教科では、担当の教員に対して「キャリア教育の視点での工夫」を明確に示すことで、担任との共通理解をはかることができ、授業改善にもつながった。

また生徒の変容として、自分の考えをもたせ発表し合うことで、友達の意見などに興味をもち取り組むことができるようになった。問題を出し合う活動で、積極的な学び合いができるようになった。発表し合うことで友達に作品に関心がもてたり、授業への参加姿勢がよくなったりした。教員や友だちに、支援を求めるようになった。などの変化が見られるようになった。

総合的な学習の時間（職場体験）では、「みつめる力」は取り組み数としてやや少なかったものの、「かかわる力」や「いかす力」については多く取り組むことができた。生徒の振り返りの中で「作業が楽しかった」「働くことは大変だと思った」「ずっと立ってやる仕事は体力がいる」などの感想があり、生徒にとっては働くことの大切さや実感し、今後の社会参加につながる体験となった。

美術（壁面づくり）では、共同制作という単元の特性や小グループでの活動だったため、「かかわる力」の取り組み数は多かったが、「みつめる力」の取り組みがやや少なかった。生徒は意思表示や役割分担が進められるようになった。また、友だちにアドバイスするなど、それぞれが協力し合い関わり合って作品作りに取り組むことで、達成感を味わうことができた。今後の課題、共同制作では自分の役割や振り返りについて深めて考えられるようにしていきたい。

3　結果と考察

生徒同士で話し合い、役割分担ができるようになった。必要に応じて、自分から友だちや教員に聞く（支援を求める）ことが増えた。伝える場面において、自分の言葉で話すことが増えた。

キャリア教育にかかわって５つの視点で生徒の実態を把握し活動の取り組みを検証することで、生徒たちは教員・友だちとの関わりが増え、相手の立場を考えよさを理解できるようになってきた。授業改善という点では、「うごく力」と「みつめる力」の育成に関して学習機会が少なく、弱さが表れた。授業一つ一つの活動が、生徒にとってどのような意味や価値があるかを深く考えた授業づくりを行う必要があると考えられるため、今後は各「力」のバランスを考えた取組を行っていきたい。

4　協議内容

キャリア教育にかかわって職場体験に取り組んでいる中学校が多く、提案者に対する質問として、「支援学級の生徒に合った事業所をどのように選んだのか」などがあり、取り組みの詳細について説明があった。各分科会では、本研究の視点や分析の評価、職場体験の実施にかかわる情報交換や成果と課題に関する意見交換が行われた。研究の視点や分析については、「５つの視点」が生徒の実態に合わせて定義付けられている点が参考になった。キャリア教育を日頃の授業内容にあてはめて実施している取り組みが良かった。担任だけではなく、各教科担当にもキャリア教育の視点を知らせ、共有することで効果が高まった。などの意見が出された。

また職場体験については、生徒のニーズに合わせて職場をどのように開拓していくかが課題である。体験先に保護者も同伴することで、保護者の意識も高まるのではないか。夢や希望をもつこと、そのために何をするのか、何ができるのかを考えることも、キャリア教育としてとらえられる。日頃のあいさつの習慣など、様々なことがキャリア教育につながるので、大切にしていきたい。などの意見があった。

5　まとめ

本研究について、生徒一人ひとりについて適切な課題を見極めている点がすばらしかった。また、協議においても、参会した方々が生徒の将来について生き生きと語っていた表情が印象的であった。障害者差別解消法や中央教育審議会答申においても、支援学級の教育課程に「キャリア教育の視点」が重要視されている。そのような情勢を踏まえても、提案者が実践された「５つの力と具体的な視点の段階的提示」は、各教科内でも具体的視点として示されており、たいへん示唆に富んだものである。今後さらに研究を進める中で、「５つの力」の項目のバランスや、生徒一人ひとりにあてはめての分析とフィードバックがなされることに期待したい。

支援学級の生徒が、見通しをもって社会参加を果たすために、生徒の状況に応じたわかりやすい言葉での課題提示、特性に応じた段階的な指導、そして何よりも生徒がいきいきと学習や活動に取り組む場面をつくることで、できることを増やしていくことが大切であろう。